

ソーシャルワーク国際定義の再検討の進捗状況について情報提供とお願い

■ストックホルムでの IFSW 総会時に配布された定義見直しに関する 3 案他

2012 年 7 月にストックホルムにおいて開催された総会時に配布資料として提示された、[ソーシャルワーク国際定義に関する見直し 3 案と解説](#)を[社会福祉専門職協議会国際委員会](#)が翻訳し、[社会福祉専門職協議会代表者会議](#)で確認したものを情報提供します。あわせて、アジア太平洋地域会議のジョン・アン会長が作成した案も翻訳し情報提供します。

今後の作業次第では、2013 年 3 月に全く別の改訂定義案が提示される可能性も高いが、この間の進捗状況と、その過程に浮かび上がった課題や国際的情勢を視野に入れ、日本のソーシャルワークの課題および現状、アジア太平洋におけるソーシャルワークの課題および現状に引きつけ、改訂案が示される時に向けて是非多くの方にお読みいただき、[ご意見がある方は日本社会福祉士会事務局までお寄せ下さい](#)。寄せられたご意見は社会福祉専門職団体協議会から IFSW へ意見提案する際の参考にさせていただきます。

また、以下に国際定義検討の過程について情報提供します。この内容は、2012 年 9 月 16 日に日本ソーシャルワーカー協会と日本ソーシャルワーク学会共催の公開セミナーとワークショップ「ソーシャルワークの国際定義の再検討」において秋元樹氏（日本社会事業大学アジア福祉創造センター長・特任教授、アジア太平洋ソーシャルワーク教育連盟会長、国際ソーシャルワーク学校連盟副会長）が報告された内容を大塚淳子氏（日本精神保健福祉士協会、常務理事）の文責において要約しているものです。

■ 再検討に関する 2 つの源流：

ラテンアメリカと APASWE（アジア太平洋ソーシャルワーク教育連盟）

1. APASWE の議論のレビュー

1) なぜ見直しを始めたのか、再検討の動機は？

10 年前に現行定義を決めた際に、10 年経過したら見直すと規定したから。

2) 当初から予想されていたことがある

・文化の違いについての課題・・・「social reform」「social justice」「empowerment」など、西洋の概念（語句）使用が多いことへの批判。

・ソーシャルワークの定義の筈なのに、いきなり The social work profession と専門職の記載で始まることへの懸念。

3) 実際に議論において焦点となったこと

・批判的検討はあまりなされず、現定義枠内での加除（例えば調和や家族などについて挿入意見）や強調に留まり、文化の違いについても西洋的と言いつつ実証データ欠落し、本能的もしくは感覚的なものに留まっていることは期待外れであった。

あれもこれも追加挿入していくと、一見包括的に見えるが、外れてしまう。usable ではなくなる。

・社会開発および国家との関わりについては考えてみたらグローバリゼーションの流れで出てくるのは必須だったが、認識として薄かった。例えば中国では国が作る定義と学

者が作る定義がある。

- ・また、そもそも世界に一つの共通定義を作るのは無謀だから、APASWE の定義を作ろうとの意見もあったが、世界共通のものをコンパクトにして、各リージョンやローカルのものを作ればよい等、重層的定義とすべしとの提案は目を覚まさせられるものだった。
- ・APC 2 1 のシンポジウムでは、これに加え、不平等や貧困化、抑圧、また価値と倫理綱領におけるジレンマなどが議論に上がった。

4) 殆ど具体的な提案はなし（見直しに対しあまり積極的な関心がない）

2. ラテンアメリカ（ブラジル）の議論のレビュー

1) なぜ見直しを始めたのか、再検討の動機は

ラテンアメリカは 10 年前の現行定義を決めた時に反対表明したが、西欧諸国に押し切られた。このことが積極的な見直し作業の原動力であり、2012 年の初めには定義に関する WS をブラジルで開催する等し、ラテンアメリカおよびカリブ海地域の諸国から多くの参加者を得て、第 2 案を作成し WS 案として承認されるなど、具体的な提案作業も行っている。

2) 2010 香港会議の時にブラジルは「新しい定義に関する」リーフレットを作成して配布する等積極的提案を行ったが、議論の機会がなく？機が熟さず？世界定義としては認められなかった。

3) 2012 スtockホルム会議では見直しについて議論の機会が持たれる予定だったため、改めて第 2 案として提示されている。

「social transformation perspective」など社会変革の見地に立っている。

■ 見直し作業の進捗状況は必ずしも円滑には進んでいなかった

1. 2012 年 1 月 IASSW 理事会前後の進展

IFSW からの第 1 案、第 2 案に対し、IASSW からも対案を出してきたが、なかなか話が噛み合わなかった。第 3 世界の意向を強く反映した案に対して、ヨーロッパ側から切り崩しの動きもある。IASSW の Vishantie が 6 月に出した案も、IASSW の理事会で拒否されて宙に浮いている。ストックホルムでは定義見直しに関するセッションを開催するはずだったが、実施されなかった。

2. 2012 スtockホルム会議における合同タスクフォース会議

ストックホルム会議において定義見直しに関するセッションが開催できなかったことを受け、IFSW と IASSW の各定義タスクフォースの合同会議が縮小して開催され、今後の作業に関して出席者全員の以下の合意点を確認した。

- ・現定義は改訂する
- ・新定義は重層定義とする。

グローバル・リージョナル・ローカルなど複数のレベルを考える。下のレベルは、グローバルな上層定義（high level definition）と矛盾しない範囲で、それぞれの地域性

に合わせた定義を作ることができる。

- ・ 上層定義は、簡明であり多言語に翻訳可能であること
- ・ 一般の人々およびメディアに理解されにくいような専門用語を使わないこと
- ・ 現在、IFSW、IASSW、ICSW が共同で取り組んでいる「グローバルアジェンダ」プロジェクトと整合性があること
- ・ ソーシャルワークの独自性を示すものであること
- ・ 地域定義の作業には IFSW および IASSW の合同 TF は介入しないこととする。
- ・ 2013 年 3 月までに地域定義を作りたい地域は作ってもよい（この部分は曖昧です）
- ・ 2013 年 3 月の世界 SWD に両団体合意の定義案を発信し、2013 年 12 月までに各加盟団体からフィードバックを得て、2014 年 3 月の世界 SWD に新定義を披露できるようにするとの新スケジュールで作業する。

■ 定義再検討の意義とは何か

1. 10 年ごと再検討の約束

SW がその中で働く社会そのものの変化と SW（専門職）自身の変化
現定義策定時の経緯

2. 「思考停止」

現定義の意義としての貢献と Sin

SW の定義ができる以前は「SW とは何ぞや」と考え続けたが、定義ができたことで、学習して覚えましょうというよう風潮を招いていて、思考停止となった。見直しという作業は、endless educational process でもあり、重要なこと。

3. 統合と多様性の同時実現

重層定義を策定できるようにすることで、地域事情から、共通する本質的な在り方を国際定義として導く帰納法的な組み立てが可能となる。統合と多様性の同時実現が可能となる。

4. “グローバル・プロフェッション” へ

SW を世界のもの（職業）とするための第 1 歩。これまでは、そして今も欧米のものを中心にしているが、現実に世界各地に SW が存在するようになった。また SW が介入すべき課題も多くある。

5. 変えないこと、遅れることの意味、問題

現実の中で改訂作業は行う必要がある。ある国の SW に有利でも、別の国の SW に不利でいいのか、それではアンフェアになる。